
東方二次創作小説 恋愛

廃人亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方二次創作小説 恋愛

【NZコード】

N4860M

【作者名】

廃人亭

【あらすじ】

霧雨魔理沙は博麗靈夢と恋人同士になり数年が経った。付き合い出すと同時に大人の魅力を備え出した靈夢に段々と依存していく魔理沙は、次第に恋人に対して不安と疑問を感じるようになる。

その心の隙をつくように、長年魔理沙に対して想いを募らせていた少女、パチュリー・ノーレッジが接近してくることで、魔理沙は靈夢とパチュリーの二人からの想いと二人に対する恋愛感情に挟まれ懊惱を深める。

魔理沙の本能と自然の流れが魔理沙とパチュリーの関係を深める

一方で、魔理沙の理性と社会的環境は靈夢との関係維持を求める。果たして恋愛は本能のものか、理性のものか。魔理沙は果たしてどのような結論をつけるのか。

第一話（前書き）

初投稿です。クーリエというサイトで投稿したものを感じながらも投稿することにしました。なにぶん小説を書くのが初めてなので、色々なアドバイスを頂けると嬉しいです。どうかよろしくお願ひします。

第一話

パチュリーは、図書館のはずれにある休憩室で横になっていた。その日は天気がよかつたので、入梅前に少し太陽の光を浴びておくのも良いかもしないと思い、午前中に庭を散歩したのが良くなかったのかもしれない。思った以上に体が疲れたようだ。

（こ）の程度の運動で体調不良になるとは、我ながら情けない体ね……

そうパチュリーが思い、軽い溜息をついた時、図書館の方から言い争う声が聞こえてきた。

（今日は、魔理沙が来たのね……しまったなあ。一週間ぶりに來たつて言つたのに、顔も見ることが出来ないなんて……）

パチュリーは心底自分を憎らしく思った。だが同時に魔理沙も憎らしく思った。何時も何時も、本を持っていくたびにまた来ると言うくせに、何時来るかなどは告げていかず、用事が済んだならばすぐ帰ってしまうからだ。

（私は『本を持って行くな』なんて、随分長い間言つた覚えがないのになあ）

どうやら魔理沙は用事を済ませたようで、言い争う声が聞こえない。それと同時に、休憩室へ向かってくる足音が聞こえてきた。

「パチュリー様、お加減はどうですか？」

小悪魔が休憩室に入つてくる。その顔は少し申し訳なさそうだった。

「また白黒に本を持つていかれてしまいました……」

「気しないで頂戴。貴方に魔理沙の相手は荷が重いわ。それより、怪我はない？下手に争つような真似はしないで頂戴ね？私は本なんかよりそつちのほうがよっぽど心配よ」

「はい、大丈夫です！…」

そう言つて、小悪魔は笑顔を見せる。いつもどおりの愛嬌がある笑顔だ。パチュリーも自然と笑みを浮かべる。

「そり、よかつたわ。あまり無茶はしないで頂戴ね」

「こりこり取りは良いものだ。平凡な毎日が生き生きとしてくる。

「それよりパチュリー様。聞いてくださいよー！」

そう言つて小悪魔は眉間にしわを寄せ、怒りの色を顔に浮かべて言うのだった。

「あの白黒、私が待てって言つたら、『お茶とお菓子の用意でもして待つて言つんだつたら待つてやらないでもないぜ？』なんて言うんですよ？本当、『盗人猛々しい』なんて言葉は、あいつのためにあるようなものですよね。ああ、思い出したらいつそう腹立たしい！…」

不満をあらわにする小悪魔の姿を、パチュリーはなんだか可愛くつて微笑ましいなあ……などと思って見ていた。するとそれが分かつ

たのか、小悪魔が不満そうな顔をする。パチュリーが会話に真剣ではないのが気に障るらしい。

「パチュリー様も、そう思いますよね？」

そう言って同意を得ようと/orする小悪魔がなおさら可愛く思えて、パチュリーはついつい頬を緩めてしまう。

「ええ、貴方の言うとおりね。魔理沙は全く傍若無人な人よ。相手のことなんてお構いなしで自分の都合を突きつけるような、ひどい人だわ」

「そうですね……その上、あいつは絶対無計画な奴です。毎日何かを考えているには違いありませんが、一寸先のことは何にも考えてはいよいよな奴ですよ。要するに、本能だけで生きているような奴なんです。野蛮な奴なんです」

「どうやらパチュリーが魔理沙を批判したことがよほど痛快だつたらしく、小悪魔はいつそう饒舌になつて魔理沙の人物批評を始めた。パチュリーは意外との的を射ているわね……などと暢気なことを考えながら、でもその短所がパチュリーにとつては好ましいものに感じられるのだから、もしかしたらこれつてあばたにえくぼというやつなのかしら？などと考え、自分の感情を分析しはじめた。

パチュリーが何故魔理沙を好きになつたか……それはパチュリーにとつてここ数年における最大の研究対象であつたと言つても良い。確かに魔理沙の容姿は好みだ。相手の背は高くないほうが良いし、顔立ちはかわいらしい方が良い。性別はどうでもよい。そもそも妖怪、神、妖精、精霊といった類は有性生殖にのみ頼らない。性格はどうか。魔理沙の性格は、まあ、良くないだろう。しかし、悪人で

はない。魔理沙は魔理沙なりに、実は限度を心得て悪事を働いている。それが小悪人の処世術と異なるのは、彼女が勤勉で人生に対し眞面目で、何よりも打算を嫌い保身を省みないことから明らかだ。また、人を喜ばせることに喜びを感じ、人を悲しませることに悲しみを感じる善性もある。目に付く悪癖も、100年生きたものの目から見ると少し微笑ましく感じる。むしろ、傍若無人さや無鉄砲さはパチュリーに欠ける性質であり、伴侶がお互いに欠けるものを補うものであることを考えれば、むしろパチュリーが魔理沙に惹かれるのは自然なことである……と、いつも通りの結論に行き着き、あばたにえくぼ仮説は疑いがあれども証拠不十分となつた。

（最も、こうやって理屈で説明してみせたつて、結局好きなものは好きなわけで、その感情が全てなんだからあれこれと考えたつて馬鹿らしいだけよね）

そうパチュリーは考えたのだが、そのすぐ後に、これがもしかしてあばたにえくぼなのかしらん？などと議論の最初に戻つてしまつた。再度考察を開始しようかとしたとき、あまりにもそれが不毛であることに気がついたので彼女は自分に呆れてしまつた。そんなことを考えていりううちにどうやら小悪魔も魔理沙批判を終えて満足したらしく、そろそろ図書館に戻りますね！！などと言い、また愛嬌のある笑顔を見せて部屋を出ようとしていた。

「少し、ここで休憩していきなさいよ。貴方、ずっとしゃべりっぱなしだったし、喉が渇いたでしょう。ここでお茶でも飲んで、ゆっくりしていなさい」

そういうとパチュリーはベッドから起き上がつた。そしてベッドに持ち込んで見ていた本を、安楽椅子の横にある小さなテーブルの上に置いた。休憩室にはベッドとテーブルと安楽椅子が置いてある。

この安樂椅子の座り心地はよく、何度も小悪魔がここで本を読みながら休憩している姿をパチュリーは見かけたことがある。パチュリーがテーブルに本を置き、休憩していきなさいと勧めたことが何を意味するかは言わずもがな、小悪魔は公然と安樂椅子の利用を許され、満面の笑みを浮かべてパチュリーに礼を言ひのだった。

鼻歌でも歌い始めそうな調子で、小悪魔は紅茶を淹れに行く。紅茶をお持ちいたしましょうか？と小悪魔は尋ねてきたが、パチュリーは好意だけ受け取ることにした。そして魔理沙が何の本を持つていつたのかを確かめはじめた。相変わらずものを見る目は確かにようで、希少性よりも実用性から評価できる本を一冊持つて言つたようであつた。こういうところは、魔道を志すものとして、またその道の先輩として好感が持てる。あはたにえくぼ仮説はまた少し論拠を失つことになつた。

「しかしそれにしても……魔理沙は残酷よね」

パチュリーはポツリと言葉を口にした。

「お茶にお菓子を用意しておけつて……そんなことを言つておいて、何時来るかなんて教えてくれないんだもの。それじゃ、準備のしようがないじゃないの……」

魔理沙の無計画さと傍若無人さに、パチュリーはビックリしても溜息をつかざるを得なかつた。

「ただいま！…つと言つても、誰もいなきどな。しつかし、相変わらずパチュリーのところは蔵書が豊富で助かるぜ。行けば必ず欲

しことと思つよくな本があるからな」

そういうて魔理沙は今日図書館から無理やり借りてきた本を確認する。エミリー・カーメ・ワングワレーの『亞大陸精靈全書』とキヤロルローズの『世界の妖精妖怪事典』……前者は外の世界の亞大陸にいる精靈について書かれたもので、幻想郷では見ることのない精靈が多数描かれている。後者もまた、幻想郷では見ることのない妖精や妖怪の伝承が紹介されているものだ。

幻想郷にいたのでは知ることのできない未知の存在を知ることができること……これは本がもたらす恩恵の最たるものだと魔理沙は思っている。特に魔道を志すものにとって未知の存在を知ることは重要である、というのは師の教えただ。

本を読み未知の存在を知ること。それはただ知識を増やすだけの作業ではない。多様な発想と柔軟な思考能力を養う教養の獲得を越えて価値のあるものである。何故なら、そもそも魔道とは自分の世界を外に広げて他を侵食する術だからである。つまり、魔法を用いる者が内包する世界の広さが侵食する世界の規模に重大な影響を及ぼすということであり、それは内包する世界の大きさが魔法使いの力量に反映されるということである。特に魔理沙のようじ、八卦炉を除けば何かの存在に頼らぬ魔法使いはそうである。

それ故、この二冊の本を得られたことは彼女にとって一大快事であつた。特に最近は研究が思うようにつまく進まず、気分の晴れない日が多かつたため、喜びは一際である。

時刻は午後三時。おやつになるようなものは生憎と置いてないが、以前アリスの家から拝借してきた紅茶を淹れて、早速本を読むことにした。

本を読み始めてから一時間、5時を少し過ぎたころ、魔理沙は空腹を覚える。一度お腹が空いたと認識してしまうと難儀なもので、

気になつて読書に集中できなくなる。本当はこのまま夜まで、いや朝まで本を読み続けていたいと思うのだが、そこは生身の人間。パチュリーやアリスのようにはいかない。止むを得ず何か夕食をと思ったが、生憎と空腹を満たすことが出来そうなものは家にはなかつた。

(……靈夢のところに行くしかないかなあ)

魔理沙の足取りは非常に重かつた。魔理沙が靈夢と付き合い始めて早数年。ここ最近、魔理沙は靈夢と一緒にいると居心地の悪さを感じるようになつていて。その居心地の悪さは、魔理沙の内から出る猜疑心を打ち消すことが出来ないために発生するもので、勝手に疑い勝手に悩み、勝手に気まずくなつているという馬鹿らしいものである。馬鹿らしいことは本人が一番よく分かつているのだが、その居心地の悪さを解消することが出来ないため、もやもやしたものをお常に抱えたまま家路に着くことになり、帰宅しても変わらず悩まされ、研究もろくに手がつかず、最近はなんだか気の晴れない毎日を送つてゐるのであつた。

魔理沙は一瞬、アリスの家に行つて夕食をこ馳走してもらえないだろうかと考えた。しかし、アリスの家には一日前に行つたばかりである。靈夢の家にはもう四日も行つていない癖に、アリスの家には一日とおかずに行つたとなると、なんとも世間體が悪いし靈夢にも氣の毒だ。何よりアリスが、そういう誤解を招くようなことを嫌うのは魔理沙も重々承知するところであり、門前払いされてしまう可能性が大きかつた。

(なんにしたつて、いつも疎遠にしたんじや靈夢が可哀想だよな)

そう考えるに至り、結局魔理沙は気が進まなかつたものの、靈夢に対する同情心と恋人としての義理に押されるような形で、靈夢の

家へと行くこととした。

「靈夢、お邪魔するぜ」

「あら、魔理沙？来てくれたのね」

そう言って、靈夢が玄関まで迎えに来る。びつやらタ飯を作つている最中だったようだ。

「いらっしゃい、魔理沙。さあ、あがつて頂戴。今、お茶を淹れるわね」

「ああ、頼むぜ」

そう言って魔理沙は居間へと進み、靈夢がお茶を淹れてくれるのを待つ。一人にとつてはお馴染みのやり取りだ。生活能力がなく、住居が『居住』という観点から見ると最悪に近い環境にある魔理沙を靈夢が世話することになるのは必然ではあるが、靈夢がすっかり世話女房になるとは一人とも想像していなかつた。魔理沙にしてみればそこまでお淑やかな性格ではないだろうと靈夢を分析していたし、靈夢にしてみればここまで恋人に尽くすことが幸せだとは思つていなかつたのである。

恋人が出来てからの靈夢は変わつた。それも良いほうに変わつた。これは彼女を知る者全てが共有する見解である。

恋人が出来たら女は魅力的になるという話事態はありふれたものだが、まさか靈夢が、それも良妻賢母に成長するとは誰も思わなかつた。靈夢からしてみると、確かに彼女自身も想像しなかつたことだが、意外と自然にそうなつたらしい。彼女曰く

「普通恋人が家に来たら身の回りのことはしてあげるし、恋人にだらしないと思われないような生活をするのは当然でしょう」

ということである。それは確かに当然なのだが、このような献身は普通付き合い始めてしばらくの間しか続かず、次第にだらしない魔理沙に対する不満だとか愚痴なんでものが出てくるものである。それが出てこないあたりが、靈夢が真に女性として魅力的になつた証拠であろう。すっかり大人の女性らしい落ち着きと優美さを備えるようになったことが、かつての靈夢を知る者共通の驚きである。

靈夢が理想的な女性へと成長したことは魔理沙にとつて幸せなことであった。靈夢と一緒にいると、魔理沙にとつてはひたすら樂が出来るのが何よりよかつた。外に向かつて精力の殆どを傾けるのが魔理沙という人物である。自然と身の回りのことはいい加減になつてしまふ。これらの問題は、夜靈夢の家に帰り、朝靈夢の家を出て、昼自宅で研究を行うというライフスタイルを送ることにより全て解決されたのであつた。そして研究に没頭したいときは精力が尽きるまで自宅にこもり、疲れきったときは心身が充実するまで靈夢の家で休養する……魔理沙にならずとも理想的な生活と言つても良いだらう。

しかしながら、魔理沙は研究に没頭したり靈夢の家に何日も滞在し続けたりという不安定な生活を何のスケジュールも作ることなく気分に任せて実行するのだから、はたから見れば如何な靈夢とてその心労はさぞや重かるうと思うのだが、とうの靈夢本人はいたつて平氣な様子である。それをいぶかしく思い、一度アリスが本当は不満があるのでないかと尋ねたことがあつたが、靈夢の返事はまさに女の鏡とも言つべきもので、『分かつていて付き合つたんだもの』とか、『そういう活発なところが魔理沙の魅力でしょ』とか、『家でくさくをするような人は支え甲斐が無くつてしまらないじゃな

い』だと、ついには『お世話する甲斐があつてうれしいくらいよ』などと答えるのだった。そのときの感想をアリスは、女としての敗北感を覚えたと周りの者にこぼしたくらいであった。

靈夢がこのように献身的で謙虚であるから、いくら魔理沙が放蕩をしたとしても二人の仲が険悪になるようなことはなかつた。魔理沙が靈夢に対して不満を抱く理由なんてものはある訳がないのだから、二人が疎遠になるとすれば、それは靈夢が魔理沙に愛想をつかしてしまつた時であろう……これもまた、彼女たちを知る者全員の共通した見解である。そして靈夢が愛想をつかすそぶりを見せない以上この一人は仲睦まじくあるだらうし、既に数年の間恋人として良好な関係を維持してきたのだから、もう離れ離れになるようなこともあるまいと思い、周りの者は一人を微笑ましく思い見守つてゐるのであつた。

しかし、実際は、今小さな波乱が二人の間に起つてゐるのである。二人の間にという表現は誤つていはないが、正確には魔理沙の側にのみ起つてゐると言つべきだらう。それは波乱というよりは不穏の種といつべきものかもしれない。魔理沙は何時の間にか、靈夢と一緒にいることで心が癒されなくなつてゐたのである。

ことの発端は魔理沙が靈夢にした他愛も無い質問であつた。

それは満月の美しき夜であつた。研究がひと段落し、三日ぶりに靈夢の家を訪れた魔理沙は、靈夢と二人で月見でもしようと提案した。もちろん靈夢が断るわけも無く、手早くお酒とおつまみの準備をし、魔理沙を慰労するため、甲斐甲斐しくお酌をし、話の相手をするのであつた。久しぶりに魔理沙が帰つてきて嬉しかつたのである、いつもは付き合う程度の飲酒に控える靈夢が、その日は一合近く酒を飲んでいた。それが何時もより大胆にさせたのか、靈夢は魔理沙の肩に寄り沿いしなを作るのだった。もとより魔理沙は上機嫌であったが、普段と異なる甘えるような恋人の仕草にいつそう機嫌を良くした。気をよくした魔理沙は、少し靈夢をからかつてやる

「と思ひ、昔の話を持ち出したのだった。

昔のことを言われては、靈夢も恥ずかしいところがあるようで、顔を赤らめて曖昧に返事をするばかりであった。終には昔の話は止しましようなどと言つてくるのであった。それがいじらしくかわいいため、魔理沙はなおも昔の話を続けた。靈夢は諦め、顔を俯かせて魔理沙の話に付き合つことにした。そのとき、魔理沙は「一人が思いを伝え合つたときの話を持ち出した。」こればかりは魔理沙も少し恥ずかしく思ったので、なかなか切り出すことはしなかつたが、酒と場の勢いが彼女を省みさせなかつた。

「冗談交じりに魔理沙は尋ねた。

（……靈夢は、今でも『魔理沙の顔を見るだけで胸が苦しくなる』のか？）

その言葉を受けた靈夢は、何かおかしいものを見るかのような微笑を浮かべ、魔理沙の顔を見て答えた。

「そんな初心だったんじゃ、私、とてもじゃないけどこんな大胆なこと出来ないわよ？」

そういうて、さもおかしげに靈夢は笑うのだった。

「それもやうだな。はは、つまらないことを聞いていたやつたぜ」

そう言つて魔理沙は、昔の話はそれつきりにして、話題を無難なものに変えるのだった。

魔理沙がつまらないことを聞いたと答えたのは、実際にそれが彼女の正直な感想であったからだ。確かに、数年来の付き合いをしている恋人同士が惚れた腫れたで浮かれていたときの気持ちを確認し

あうなどといふのは滑稽な話である。しかし魔理沙は、何時の間にか魔理沙も靈夢もお互に顔を見るだけで胸が高鳴るなどという気持ちを忘れていたのだが、どうしてもそれを忘れて良いようなものであるとは断定し切れなかつた。魔理沙の理性がどれほどこれを馬鹿げた疑問で、長く付き合つていれば初心な気持ちは忘れてしまうという現象が極めて自然なものであり、世のつがいは皆そうであると主張したとしても、やはり魔理沙は疑問を打ち消しえなかつたのである。どこか、今の魔理沙と靈夢の間にある恋愛感情が、人工的で無機質なように感じるのだった。

もう一つ魔理沙をして靈夢に疑問を感じさせしめるのは、靈夢が魔理沙の問いに對して浮かべて微笑であつた。聊か子供っぽい問い合わせする魔理沙に対し、あるいは揶揄を込めて笑うその妖艶さは、常に魔理沙が知る靈夢の姿ではなかつたのである。それはかつて知る靈夢の姿でもなかつた。およそ魔理沙の知りえない靈夢がそこにあつたように思えるのだった。そしてそれがもしかすると本当の靈夢の姿なのかもしれないと魔理沙は思わずにはおれなかつた。だとすれば、魔理沙が知る靈夢は本当の靈夢ではないのではないかと思うのだった。靈夢が自然の靈夢から離れた作り物であると仮説すると、魔理沙は靈夢が何故あれほどに良妻賢母となつたのかが説明されるように思えるのである。そうやって考えを巡らして行くうちに、魔理沙は靈夢を不自然の產物と疑わざるを得なくなつてしまい、靈夢と自分を結び付けていた絆そのものが本物と偽りとで繋がつた歪なものであるかのように思えてくるのであった。

もちろんこれは、馬鹿げた仮説である。魔理沙自身が何よりもそう思つのである。魔理沙の理性は、これらの仮説を全て却下しているのだ。何故なら、どれほど勘織つたとしても、靈夢が魔理沙に対して向けている愛情と献身の実績があるし、魔理沙の直感 자체も靈夢の愛情を疑い得ないからである。だがそれでも、疑いを持つと疑いを止められなくなるのが人間の性である。魔理沙はそう考えた後、靈夢と会つたびにどうしても違和感を覚えるのであった。次第に違

和感は大きくなり、ついに魔理沙は靈夢と時間を共有することで心が安らぐよりは疲れを感じるようになってしまった。

魔理沙は靈夢が淹れてくれたお茶を飲みながら、今、靈夢はどんな気持ちで夕飯の準備をしているのだろうかと考えざるを得なかつた。あるいは、どのような気持ちでこのお茶を淹れたのであらうかと考えざるを得なかつた。誰に強いられるでもなく、彼女の心が考えることを求めるのだつた。

魔理沙は状況を整理し始める。魔理沙は事前の連絡も無く、数日靈夢の家に帰つては来なかつた。帰つてきたと思えば、夕食の準備をしている最中という遅い時間の帰宅である。しかも、平生彼女が夕食を作る時間はもっと早いことを考えれば、ぎりぎりまで魔理沙が帰つてくる可能性を考えて時間をずらしていたのであらう。そして魔理沙は、相変わらずの亭主関白で謝罪も無く当然の様子で靈夢の淹れたお茶を飲んでいる。

この状況では、よほど忍耐力のある人間でも、どうしたつて腹の中に一物を抱えざるを得ないだらう。とすれば、ああやつて素直に喜んで見せている姿は、献身する姿は偽りを含んでいるのではないだらうか？ そう疑いを強める一方で、魔理沙の目から見た先ほどの靈夢は心底嬉しがつていたように思えるし、献身そのものを幸福にすら思つていていたから、到底断定することは出来ず、疑いは疑いのまま悩みとなつて蓄積されていくのであつた。

こつまで悩むのであれば、いっそ自分が変わつてしまえば良いじやないかと魔理沙が考えなかつたわけではない。しかしそれは、魔理沙にとって、魔理沙の自然な状態を強制的に変えることを意味するように思えて仕方が無かつた。それはあたかも自分自身が偽りの存在となり、自分を含め全てを騙そうとする試みのようにすら思えるのであつた。世の中には自然と自分を変化させることの出来る人間もいるだらうが、少なくとも魔理沙はそれが出来そうにない人間であつた。それを自覚するからこそ、今まで魔理沙は、靈夢に負担

をかけてこることを自覚しながらも生活スタイルを変えてこなかつたのである。それは他の人間から見れば怠慢であり、靈夢の献身に応えてやろうとしない無慈悲で横暴な振る舞いかもしけないが、魔理沙にとつてはこれが一番の誠実さなのであつた。それ故、魔理沙はどうしても自分を変えるといつ解決策を選択し得なかつたのである。

考え事をしているうちに靈夢が食事を作り夕飯が始まつた。この日靈夢は食欲がないと言い、ご飯もおかずも少なめであつた。魔理沙は遠慮しないでと言い、きつちり一人前分の食事が用意された。だが魔理沙も食欲が無かつた。しかし魔理沙は食事を残さなかつた。靈夢が晚酌に付き合つと言つてくれた。どうもそういう気分ではないと断ると、靈夢は少し寂しそうな顔をした。体調が優れないから今日は早めに横になりたいと告げると、靈夢は非常に心配そうにした。そして布団を二組別に敷いてくれた。魔理沙が寝ると横で靈夢も就寝についた。床についてしばらくすると、明日の朝はお粥でも作ろつか?と靈夢が尋ねてきた。一晩休めばよくなると思うと答えると、それはよかつたと安堵の声をあげた。半刻もしないうちに靈夢の寝息が聞こえ始めてきた。魔理沙は到底眠れそうにもなかつた。結局翌朝、無理を言つて靈夢に粥を作つてもらつことになつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4860m/>

東方二次創作小説 恋愛

2010年10月10日20時10分発行